

# 専門科目「看護学概論」におけるLTD学習法の導入 — 第1報 授業の概要とディスカッションスキルの変化

## The First Report Introduction of the Learning through Discussion into Specialized Subject “Introduction to Professional Nursing” : It’s Syllabus and Students’ Change of Discussion Skill

足立はるゑ 上田ゆみ子 伊藤千晴 山口直己 夏目美貴子 仙石妙子

Harue ADACHI Yumiko UEDA Chiharu ITOU  
Naomi YAMAGUCHI Mikiko NATUME Taeko SENGOKU

### 要 旨

目的：本研究は学生の主体的な学習能力を高めるために，専門科目「看護学概論」の講義にLTD学習法を導入し，その効果をディスカッションスキルの変化から考察するものである。方法：平成18年度入学生78名を対象とし，LTD学習実施前後に安永の「ディスカッションスキル尺度」を用い質問紙調査を行った。その結果以下の効果が示された。

**1.** LTD学習実施前後のDS得点は，各因子とも実施後に有意に高くなり，ディスカッションスキルが向上した。**2.** LTD学習後のDS4因子の得点は高い順に＜第3因子：他者への配慮と理解＞，＜第2因子積極的関与と自己主張＞，＜第1因子：場の進行と対処＞，＜第4因子：雰囲気作り＞であった。**3.** LTD学習前後のDS得点の差が最も大きく，LTD実施後の得点が有意に高くなったのは，＜第1因子：場の進行と対処＞で，第2・3因子の得点に近づいたことにより，実施前に比べてバランスのよいDSが備わった。今後，さらにLTD学習の効果を多面的に分析し，有用性を検討する必要がある。

キーワード：LTD学習法、ディスカッションスキル（DS）、協同学習、看護学生

### I. はじめに

臨床場面において看護職は日々新しい問題に出会い，多くの場合それらを自分で即座に判断し，対応することが求められる。したがって，受動的に学んだ過去の知識の活用のみでは不十分であり，専門的知識や体験を糧に自ら考え判断する能力が必要となる。

また，看護は24時間継続される仕事であり，チームで看護していることから，臨床現場での問題解決や，より質の高いケアを実施

するために，他者との意見交換，ディスカッションスキル（以下DSという）が必要となる。このような観点から，看護基礎教育においても学生の主体性を高め，DSを向上するための教育上の工夫が必要であると考え。

筆者はこのような授業方法を模索する中でLTD (Learning Through Discussion) 話し合い学習法に出会い，この学習方法を保健看護学科1年生の専門科目「看護学概論」に

導入することとした。

LTD 学習法とは <sup>1)</sup>1962 年アメリカの William F. Hill 博士が提唱した協同学習法で、小グループによる討論を中心とした学習法である。その後 Rabou らがこの学習法のモデルを 15 年以上施行し、大学

教育に利用しやすい形にした。日本においても安永 <sup>2)</sup>により日本の大学教育に導入されている。  
看護学概論に LTD 学習法を導入した理由は、この学習方法が学生の主体的な学習活動を行うことを目指したものであり、前述の意図に合致し看護学という未知の領域で「看護とは何か、専門職としての看護師の役割とは」を考えるのに受身的な授業でない授業形態が効果的であると考えたからである。

本稿では LTD 学習の紹介と学習効果を学生の DS の変化に焦点をあて報告する。

## II. LTD 学習法とは

LTD 学習法とは、Learning Through Discussion の略で、(以下 LTD という)前述のごとく 1962 年アメリカの William F. Hill 博士が提唱し、Rabou らに受け継がれ大学教育に利用しやすい形にしたものである。この学習法が考案された背景には、安永 (1999a) の報告によると学習に失望した学生たちの存在があり、そのような学生たちを生み出した一方的で権威的な講義が学生に学ぶ喜びや学習過程を楽しむといったことを希薄にさせたという教授の問題点を指摘している。そのような背景をもつ中で学生に「学習の主体性をもたせ、学ぶ喜びを体験させたい」という Hill 博士の希望が基で、LTD 学習法が提唱されたといわれている。日本においても 1990 年代初期から教育学分野等 <sup>2-5)</sup>において徐々に取り入れられ、その効果が報告されている。

LTD 学習法は学習者一人ひとりを能動的にさせ、学習仲間との話し合いを通して、教材の理解を深めることを目的とした教授・学習法であり、従来の教員主導型の授業とは異なる。特にテキストの読解に有効な学習方法である。この学習法の基本は過程プランにあり、過程プランは 8 つのステップから構成されている (表 1)。各ステップには有効であるとされる時間が配分され、ミーティングは約 60 分が理想的である。この過程を効果的に行うには事前の準備が重要であり、学生の個人学習を欠くことはできない。また、グループによる討論という手段を用いるが、個人の学習が促進されるためにはグループの雰囲気重要であり、グループは自由で対等な立場で自分の考えを発言できる場であることが必要である。

表 1 LTD 学習法の学習ステッププラン (Rabou ら)

討論のステップ		時間
ステップ 1	導入	2-4 分
ステップ 2	語彙の定義と説明	3-4 分
ステップ 3	著者の全体的な主張	5-6 分
ステップ 4	主題や話題の選定と討論	10-12 分
ステップ 5	他の場面に対する教材の適用と統合知識との統合	15-16 分
ステップ 6	自己に対する教材の適用	10-12 分
ステップ 7	著者の主張の評価	3-4 分
ステップ 8	集団と個人の遂行評価	7-8 分
		全体時間 60 分

注：配分時間は各ステップ遂行の目安

期待される学習効果は、Rabow,et al.(1994)<sup>1)</sup>によると①教材内容の学習 ②分析的思考や批判的思考スキルの獲得、③コミュニケーションやディスカッションに必要な言語的・分析的・対人関係スキルの発達など

である。つまり、高次の認知学習の促進と態度面でも効果があることが報告されている。この学習法の体験がディスカッションに関する認識や行動を改善する傾向があることが安永（1999b）により報告されている。

## 1. 「看護学概論」における LTD の実際

### 1) LTD の位置づけ

看護学概論は、看護学を初めて学ぶ学生にとって「看護とは何か、専門職としての看護師の役割は何か」を学ぶ、看護学の導入となる科目である。LTD を実施したのは、この科目の中で設定している6つの単元のうち、「先人から学ぶ看護論」と「闘病記から学ぶ人間観」の単元で4回設定した。時期は5月上旬～6月上旬で、授業開始後4回目からである。

### 2) 学習目標

(1) 課題図書の新読とディスカッションを通して看護の概念並びにキーワードの解釈を深める。

(2) LTD を通してDSを高め、課題に関する理解を深める。

(3) 討論の過程において分析的、批判的思考を働かせ、思考力、批判力を習得する。

### 3) 授業の対象と LTD 学習過程

(1) 対象：本稿では平成18年度入学生78名（女子68名、男子10名）に行った授業を紹介する。グループ編成は入学直後の学生であることから、学籍番号順に1グループ6～7名とし、12グループとした。グループワークの際は、助手5名と授業担当者の計6名がアドバイザーとしてかかわった。学生へのかかわり方としては、すぐに答えを出すのではなく、まず自分達で考えさせ、その後ヒントを出すようにし、学習目標3については、考え方が表面的であったり、偏った考えに陥らないように適宜アドバイスや解

説をした。教員一人が2グループ担当した。

### (2) 学習過程

Rabouらによって開発されたLTD学習法のステップ1～8（表1）を基に作成した討論ステップと、LTD4回の授業に使用した教材をそれぞれ表に示した（表2、表3）。LTDの実施にあたっては、本学習法の目的、授業計画、予習等のオリエンテーションを初回授業と前週の後半に実施し、課題図書の新読レポートを基にディスカッションをすることを説明した。

動機づけとして次の2点をアピール

した。①協同学習の精神<sup>6)</sup>である「自分の学びが仲間の役に立ち、仲間の学びが自分の役に立つ。だから真剣に取り組む」②将来医療従事者としてチームで働く上で、ディスカッション能力を高める必要がある。大学は高等教育の場であるから新しい学習方法で自分の意見を述べる訓練をし、お互いに高め合う。

そして、仲間との協同学習には個人の予習が前提であり、学生の主体的な学習姿勢が重要であることを強調した。次の過程を経て学習を展開した。

① 課題の予習を行う：課題図書を精読しレポート課題について各自の解釈や考えを記述し提出する。そのレポートのコピーを手元におき、ミーティングに活用する。

② ミーティングを行う：コピーしたレポートを基に、LTDのステップにそってメンバーと意見交換をする。時間内に終わるように時間管理をしながら行い、進行係を決めるが、メンバー全員がリーダーという認識で意見交換を進める。

③ ミーティング終了後に評価を行う：LTD各回の実施内容の評価として、「集団ミーティングの評価」と「LTD過程プランの評価」を評価票を用いて行う。LTD学習では

表2 看護学概論における学習ステッププラン

討論のステップ	時間
ステップ1 導入 (名前を覚える, 本時の課題の共通理解等)	5分
ステップ2 語彙の定義と説明 (事前学習で不明な用語や意味の理解)	5分
ステップ3 著者の全体的な主張	5分
ステップ4 主題や話題の選定と討論	30分
ステップ5 他の場面に対する教材の適用と統合 (著者の考えや主張を身近なことに当てはめる)	15分
ステップ6 自己に対する教材の適用	10分
ステップ7 著者の主張の評価 (各自の見解, 疑問を出し合う)	4分
ステップ8 集団と個人の遂行の評価 (所定の用紙を使用)	6分
全体の時間 80分	

表3 看護学概論のLTD学習法に使用した教材

回数	使用教材	学習目標
1	V.ヘンダーソン「看護の基本となるもの」(日本看護協会出版会) P1-84.	・ヘンダーソンの看護の考えや看護の定義を理解する.
2	F. ナイチゲル「看護覚え書き」序章-第3章, 13章 (現代社)	・ナイチンゲルの看護の考え方, キーワードの解釈を深める.
3	ウイーデンバック「看護における援助技術」P81-92, (現代社)	・ウイーデンバックの「援助とは何か」, 援助の概念を理解する.
4	闘病記「ふたたび愛をありがとう」中村のり子 (エッフェー出版)	・闘病記を通して, 人間の強さと弱さ看護の役割等について考えを深める.

これらの評価を行うための評価票が作成されている。

#### 4) LTD 実施時の留意点

LTD 導入に際しては, 以下の準備と留意をして実施する。

- (1) 授業協力者との事前打ち合わせ, レポート点検基準等を確認する。
- (2) 使用する教材の難易度と学習量を考慮し, 連休等を考慮して提出期限を設定する。

### III. LTD の評価方法

課題図書による学習目標の評価は期末試験で総括的に組み, 本稿では紙面の都合上, DS の変化を中心に報告する。

DS の評価は以下の方法で行った。

- 1) 学生のDSの効果をj知るためにLTD学習前とLTD学習4回終了後に安永の「ディスカッションスキル尺度<sup>7)</sup>(以下DS尺度)」による質問紙調査を行った。この尺度は4因子(第1因子:場の進行と対処7項目,第2因子:積極的関与と自己主張7項目,第3因子:他者の配慮と理解,第4因子:雰囲気作り4項目)計25項目で7段階(できる7

点～できない1点)を評価するもので、尺度の信頼性が確認されている。得点が高いほどDSが高いことを示す。DS尺度を表4に示した。今回のLTD実施前後のDS尺度の信頼係数(クロンバック $\alpha$ 係数)は、全体で実施前0.95,実施後0.93,因子別では0.87~0.91と基準値0.7を満たしていた。

2)分析方法:DS得点のLTD前後の変化をもとに学習効果と今後の課題を考察した。DS得点の分析にはノンパラメトリック検定を用いた。DS得点のLTD学習前後での比較にはWilcoxonの符号付順位和検定を用い、有意水準0.05未満を統計的に有意とした。

3)倫理的配慮:倫理的配慮として、学生にLTDを導入する趣旨、学習成果を研究活動として公表したいこと、成績に関係しない、個人が特定されることはない旨を授業前に説明し、調査の了解を得た。

#### IV. 結果

##### 1. DSスキル評価

学生78名のうち欠損値のない75名を解析対象とした。DS得点の変化を表5に示した。

LTD実施前の得点は最低52点~最高154点,平均 $101.2 \pm 18.7$ 点であった。LTD学習実施後の得点は最低61点~最高175点,平均 $125.3 \pm 20.1$ 点であった。

因子別では,LTD前のDS平均得点は高い順に<第3因子:他者への配慮と理解> $34.6 \pm 5.4$ , <第2因子:積極的関与と自己主張> $31.3 \pm 8.2$ , <第1因子:場の進行と対処> $25.7 \pm 6.8$ , <第4因子:雰囲気作り> $17.2 \pm 4.8$ で,LTD後の得点はLTD前と同様に第3因子 $37.8 \pm 5.9$ ,第2因子 $35.8 \pm 6.9$ ,第1因子 $32.3 \pm 6.4$ ,第4因子 $18.8 \pm 4.2$ ,第3因子の順に得点が高かった。

DS平均得点は項目全体及び因子別得点ともに有意な差が認められた( $P < 0.05$ )。

次にDSスキル25項目のLTD前後の得点を因子別に見ると(図1~4),第4因子を除き,他の因子は7項目すべての項目の実施後の得点が有意に高かった。

実施前後の得点差は<第1因子:場の進行と対処>は $+1.1 \sim 0.7$ , <第2因子:積極的関与と自己主張> $+0.8 \sim 0.5$ , <第3因子:他者への配慮と理解>は $+0.5 \sim 0.4$ であった。<第4因子:雰囲気作り>において,実施後の得点が有意に高かったのは,4項目中2項目で得点差は $+0.6 \sim 0.2$ であった。

DS能力25項目のうち,LTD前よりもLTD後に得点が高くなった上位の項目は“ディスカッションの要所で参加者の意見をまとめる”“話の流れを判断し,参加者をリードする”“説得力のある話し方をする”“他者が納得する意見を述べる”“発言内容を組み立てる”で,いずれも<第1因子:場の進行と対処>であった。

##### 2. 討論ステッププランと学生の態度

学生はLTD学習という初めての経験に好奇心と意欲を示し,ほとんどのグループは楽しい雰囲気で見聞交換をしていた。授業の学習ステップ(表2)はRabouの示したステップ(表1)の時間より20分長く設定し,特にステップ4は30分とRabouらの2倍の時間を組んだが予想通り,学生は討論する主題の決定や内容の共通理解に時間を要していた。回を重ねるごとに時間管理はうまくなり,時間内に課題を達成できていた。

LTDの課題図書購読とそのレポートは期限内に,全員が提出できた。グループのディスカッションは毎回楽しい雰囲気で開催されていたが,個別に見ると,発言の少ない者

や相槌を打つだけの学生が数名存在した。

(詳細は次報に譲る)

表4 ディスカッションスキル尺度項目 (25項目)

<b>第1因子 場の進行と対処 (7項目)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ディスカッションを手際よく進める</li> <li>・その場にあった話題をうまく提供する</li> <li>・説得力のある話片をする</li> <li>・発言内容をうまく組み立てる</li> <li>・ディスカッションの流れを素早く判断しながら参加者をリードする</li> <li>・他者が納得できるような意見を述べる</li> <li>・ディスカッションの要所で参加者の意見をまとめる</li> </ul>	
<b>第2因子 積極的関与と自己主張 (7項目)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手が誰であっても反対意見は堂々と述べる</li> <li>・自信をもって意見を言う</li> <li>・思ったことを発言する</li> <li>・自分の意見に自信を持つ</li> <li>・恥ずかしがらずに意見をいう</li> <li>・疑問点を質問する</li> <li>・自分の意見をはっきり言う</li> </ul>	
<b>第3因子 他者への配慮と理解 (7項目)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者の気持ちを理解する</li> <li>・他者の意見を尊重する</li> <li>・他者の意見をよく聞く</li> <li>・相手の意見を相手の立場に立って聞く</li> <li>・相手の意見を自分の立場からきく</li> <li>・声の調子から相手の気持ちを読み取る</li> <li>・場の雰囲気を理解する</li> </ul>	
<b>第4因子 雰囲気作り (4項目)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・明るく楽しい雰囲気を作る</li> <li>・場をうまく盛り上げる</li> <li>・陰悪なムードを取り除く</li> <li>・ユーモアを交えながら話す</li> </ul>	

文献: 安永ら(1999): ディスカッション・スキル尺度開発より

表5 LTD 学習実施前後の平均 DS 得点

		N=75		
DS 全体・因子別		学習前	学習後	P 値
DS 項目全体		101.2±18.7	125.3±20.1	0.00 **
因子	場の進行と対処	25.7±6.8	32.3±6.4	0.00 **
	積極的関与と自己主張	31.3±8.2	35.8±6.9	0.00 **
	他者への配慮と理解	34.6±5.4	37.8±5.9	0.00 **
	雰囲気作り	17.2±4.8	18.8±4.2	0.03 *

\* P<0.05    \*\*P<0.01

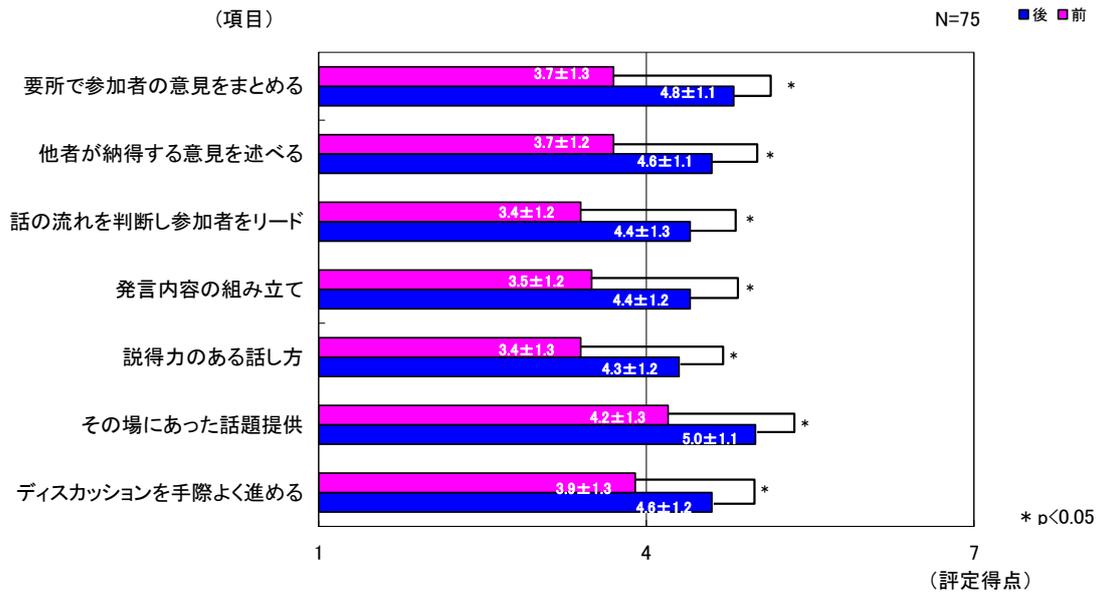


図1 場の進捗と対処(第1因子)

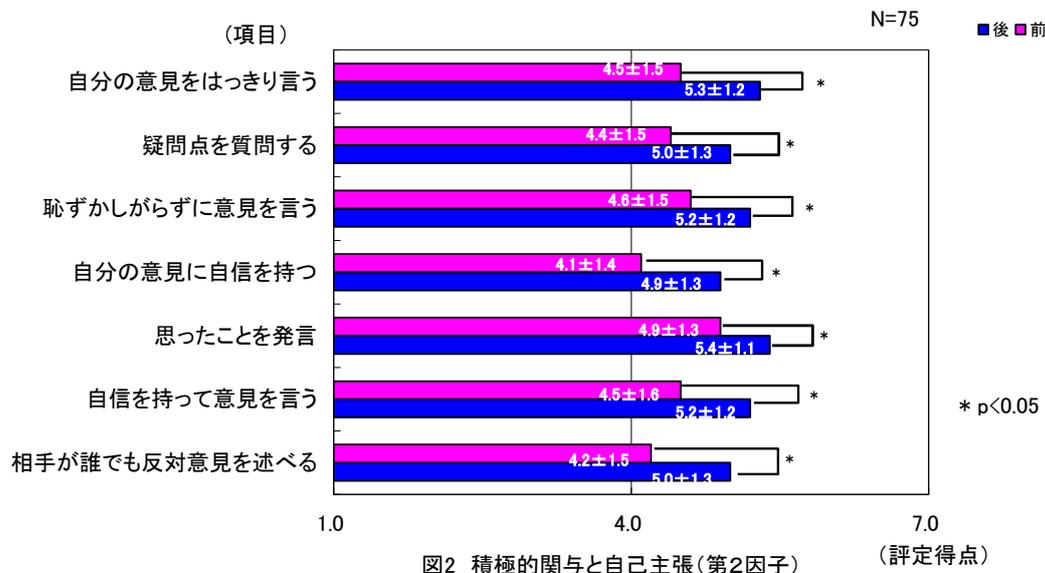


図2 積極的関与と自己主張(第2因子)

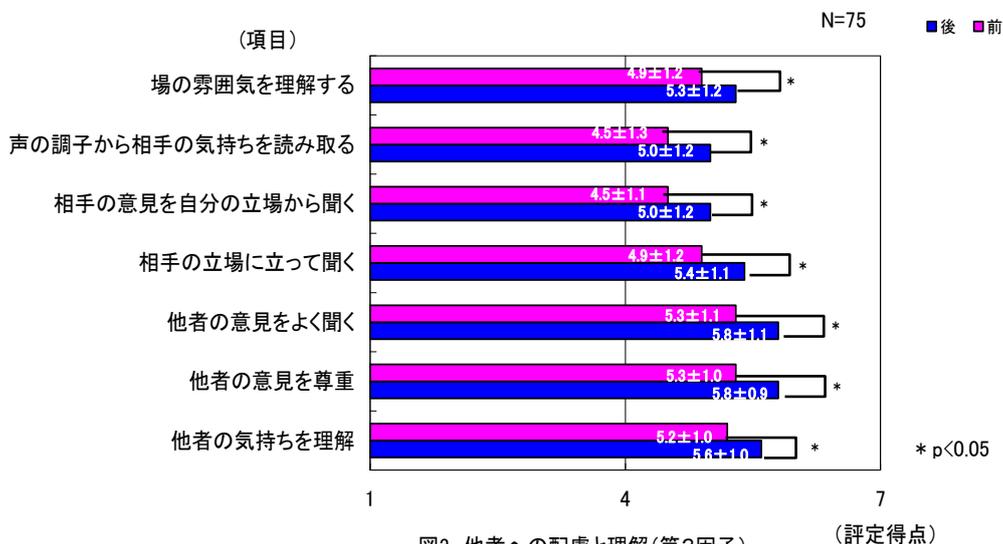


図3 他者への配慮と理解(第3因子)

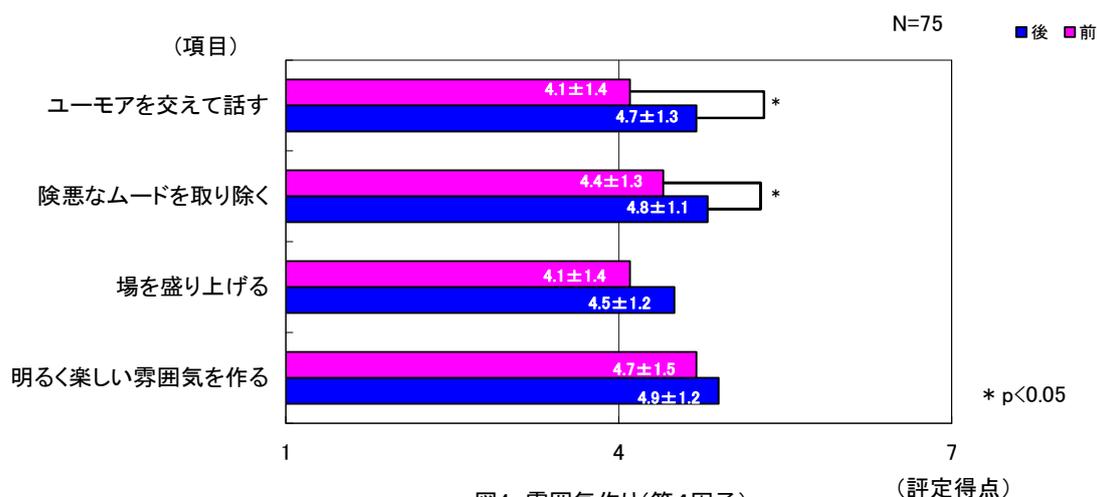


図4 雰囲気作り(第4因子)

## V. 考察

### 1. DS 得点の変化について

学生の自己評価による LTD 後の DS 得点が DS 前に比べて有意に高くなった。

これは安永ら (1999a) の報告と同様の結果を示し、4 回の LTD により DS が向上したといえる。他の授業科目において入学後のこの時期に、グループワークを組んでいた科目はなく、学生の事前学習としての課題レポートも期限内に全員が提出していたことから、学生の新鮮な学習意欲が反映していたものと推察する。

また、保健看護学科入学生の特徴として、入学直後から自己の目的が明確になっている者が多く<sup>8)</sup>、事前の動機づけも役立ったと考えられる。しかし、LTD の最終目標が個人の学習を促進することにあるため、今回の調査では全体の傾向を明らかにしたのみで今後、グループ差、個人差にも目を向けていく必要がある。

DS スキル 4 因子のうち、LTD 実施前後の得点差が他の因子に比べて大きかったのは、<第 1 因子：場の進行と対処>で、この因子は LTD 実施前の得点が第 2・3 因子に比べて低く、全体が 25.7 点、各項目が 3 点台で

あったのが LTD を実施することで全体 32.3 点、各項目が 4 点台と向上し DS の 4 因子中 3 因子が同じようなレベルに近づいたといえる。

逆に、LTD 前の DS 得点が最も高かった因子は<第 4 因子：他者への配慮と理解>で学生達は他者の話を聞くといった傾聴スキルや、他者の状態や気持ちを察することはできると認識している。実際にこのような光景は見られるが、真の意味で他者の意見を傾聴できているかは疑問である。安永ら (1999b) も DS の第 3 因子が実施前に高く、特に女性の場合は男性に比べて顕著に高いことを報告していることから考えると、今回も学生は女性が 65 名中 55 名と多く、もともと<他者への配慮と理解>のスキルは備えていたと考えられる。しかしながら、他者の気持ちを配慮することをし過ぎると、ディスカッション行動を阻害する可能性がある<sup>9)</sup>ことから注意が必要である。

<第 4 因子：雰囲気作り>の LTD 学習実施前後の得点変化が少なかったのは、学習時期が関与していると思われる。本科目の LTD 学習の時期が 5 月～6 月であり、学生は新しい環境に適応する過程に

あるために、ユーモアや場を盛り上げるといったスキルを発揮する関係形成が十分でないことによると思われる。もともとこの因子は他の因子に比べて低かったことから、ユーモアが不得意といわれる日本人の特性が関与している可能性がある。この学習における相互作用が今後の仲間づくりに繋がっていくと考える。

## 2. 今後の課題

新しい学習方法として LTD 学習を試み以下の課題が浮上した。

### 1) グループ編成について

今回、LTD を初めて導入したためにグループメンバーの配置は学籍番号順に 12 のグループに編成した。しかし、学習効果を高める意味においてはグループを等質に近い編成にするか、或いはさまざまな学習スタイルをもった学生を混在させるかは、検討の余地がある。また、先行研究<sup>10)</sup>によると、今後グループ差等の分析においては学生個々の協同学習に対する認識や自尊感情の影響も考慮する必要がある。

グループ学習全体についての感想では入学後間もない時期に LTD を導入することが仲間づくりや、協同学習の楽しさを体験できたという感想をもつ学生が多かった。しかしながら、今回の調査では LTD の経験回数による進歩状況やグループ間の比較については分析していない。これまでの体験ではグループ学習を好まない学生も存在していることから、より効果的な教育方法を検討するには、今後更に分析を進める必要がある。

### 2) 教材の選択について

LTD では使用する教材による学習効果の影響が大きい。本科目は専門科目であり、課題図書には専門用語や看護理論家の難解な

用語も出てくるため、適宜、解説をしたり、理解を補ったりしながら実施した。しかし、事前学習の不十分な学生もいることから、これらの理解を助ける資料等の工夫が必要であると思われる。

### 3) ディスカッションを促進する指導

今回、LTD の過程における教員のかかわりは、前述のようにグループの話し合いをモニターし、適宜助言や解説をした。

しかしながら、ディスカッションが低迷した際、或いは発言の少ない学生へのアプローチが適切であったかは、検討の余地がある。タイミングよく適切に、グループの雰囲気や阻害しないように助言をしていく必要がある。

## VI. まとめ

今回、平成 18 年度入学生（1 回生）78 名を対象に「看護学概論」の講義の一部に LTD を導入し、その効果を DS 得点の変化に焦点を当てて分析した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) LTD 実施前後の DS 得点は、実施後の得点が有意に高く、DS が向上した。
- 2) DS 4 因子の得点は高い順に＜第 3 因子：他者への配慮と理解＞、＜第 2 因子：積極的関与と自己主張＞、＜第 1 因子：場の進行と対処＞、＜第 4 因子：雰囲気作り＞であった。
- 3) LTD 前後の DS 得点の差が最も大きかったのは 4 因子中＜第 1 因子：場の進行と対処＞であり、LTD 後の得点が有意に高くなったことで第 2・3 因子の得点に近づき、実施前に比べてバランスのよい DS が備わった。

## VII. おわりに

本稿は、高等教育の教育改善の一環として取り組んだもので、日本におけるLTD学習法の実践報告は少なく、散見される程度である。したがって、本稿ではこの学習法の紹介と看護学概論における試みを紹介した。LTD学習法の効果については、今後、LTD学習法の「集団ミーティング」並びに「LTD過程プラン評価」等について分析し、授業改善に役立てたい。

## 引用文献

- 1) Rabou J 他：討論で学習を深めるには—LTD話し合い学習法。丸野俊一他訳，ナカニシヤ出版，1-4,1997.
- 2) 安永悟：LTD話し合い学習法の大学教育への適用—授業概要と効果—。久留米大学文学部紀要人間科学科編第15号,45-64,1999a.
- 3) 安永悟：LTD話し合い学習法の導入—参加者の評価と指導上の注意点—。久留米大学文学部紀要人間科学科編第7・8号,49-50,1995.
- 4) 藤田敦，藤田文，安永悟：LTD学習法の短期大学「基礎ゼミ」授業への適用，大分大学教育福祉学部附属教育実践研究指導センター紀要，18,37-50.
- 5) 山本富士江：LTD学習法と自己教育力，Quality Nursing Vol.10.(7),85-91, 2004.
- 6) 安永悟：協同による大学授業の改善，教育心理学年報，Vol48，169，2009.
- 7) 安永悟，江島かおる，藤川真子：ディスカッションスキル尺度の開発，久留米大学文学部紀要（人間科学編）12・13，45-75，1999b.
- 8) 堀井直子，三浦清世美，久米香他：本学看護学生の入学時における学科志望動機

—志望動機を反映させた教育を探る—中部大学生命健康科学研究所紀要，Vol.4 11-18，2008.

- 9) 中島義道：＜対話＞のない社会，PHP新書，1997.
- 10) 長濱文与，安永悟，関田一彦他：協同作業認識尺度の開発，教育心理学研究，57，24-37，2009.

## 用語解説

**ディスカッションスキル**：本研究では安永・江島の定義に準じ「ディスカッションとは、参加者が友好的な雰囲気の中で、情報や意見を自由に交換しながら建設的に、ある事柄の理解を深めたり、問題を解決したりすること」とした。





著 者

足立はるゑ (Harue ADACHI)

中部大学生命健康科学部 保健看護学科基礎看護学教授。中部大学大学院 経営情報学研究科 博士前期課程修了。岐阜大学大学院医学研究科満期修了。博士 (医学)。

専門分野：基礎看護学、看護管理学。臨床看護師、看護師長、副部長を経験。教育歴として中部労災看護専門学校専任教員15年、藤田保健衛生大学衛生看護学科9年を経て、平成18年4月本校に就任。主な研究テーマは①看護職・介護職のストレスマネジメント ②看護師の人材育成に関する研究 (新人・中堅) ③臨地実習指導に関する研究。日本看護研究学会：評議員、学会誌査読委員、日本看護学教育学会：評議委員、日本看護医療学会：評議委員、学会誌査読委員、日本糖尿病教育・看護学会：学会誌査読委員。

上田ゆみ子 (Yumiko UEDA)

中部大学生命健康科学部保健看護学科助手。名古屋大学医療技術短期大学部。学士 (看護学)。現在、聖隷クリストファー大学大学院修士課程在学中。名古屋大学医学部付属病院、小牧市民病院にて看護師として勤務。看護専門学校非常勤講師、中部大学生命健康科学研究所嘱託研究員を経て現職。主な研究テ

ーマは看護学生が卒業時に習得が必要とされるコミュニケーション項目に関する研究。

伊藤千晴 (Chiharu ITO)

中部大学生命健康科学部保健看護学科助手。名古屋大学大学院医学系研究科修士課程修了 (看護学)。専門分野：基礎看護学。主な研究テーマは、看護倫理教育に関する研究。

山口直己 (Naomi YAMAGUCHI)

中部大学生命健康科学部保健看護学科助手。愛知県立看護大学大学院看護学研究科修士課程修了。修士 (看護学) 専門分野：基礎看護学。厚生連加茂病院勤務、愛知県立看護大学大学院を経て現職。主な研究テーマは、慢性疾患患者の家族支援に関する研究。

夏目美貴子 (Mikiko NATSUME)

中部大学生命健康科学部保健看護学科助手。平成15年北里大学大学院看護学研究科修士課程修了。修士 (看護学) 専門分野は基礎看護学。北里大学病院、北里大学基礎看護学領域助手を経て現職。主な研究テーマは情報プライバシーに基づく、患者情報の取り扱いに関する研究。

仙石妙子 (Taeko SENGOKU)

中部大学生命健康科学部保健看護学科助手。平成13年藤田保健衛生大学衛生学部衛生看護学科卒業。学士 (看護学)。順天堂大学医学部附属順天堂医院を経て現職。主な研究テーマは中途採用看護職の定着に関する研究。